

4. 本人および家族の状況（家族票）

現在、満64歳以下または診断・受診時点で満65歳以下であった若年認知症の方について、ご家族等から回答頂いた内容を以下に整理する。

なお、調査票は家族会、医療機関、居宅介護支援事業所、サービス事業所等を経由して直接配布され、具体的な調査対象数は不明である。回答は115票（有効回答114票）であった。

4.1 本人の状況

4.1.1 性別・年齢について

有効回答114人の年齢・性別についてみた。

まず、性別の状況は、「男性」60人（52.6%）、「女性」54人（47.4%）であった。年齢の状況は、現時点の満年齢（以下、現年齢）で「64歳以下」が57人（50.0%）、うち男性33人（28.9%）、女性24人（21.1%）であり、現年齢「65歳以上」が同じく57人（50.0%）、うち男性27人（23.7%）、女性30人（26.3%）であった。

なお、最若年は満43歳2名（男性1、女性1）、最高齢は満82歳1名（女性）であった。

図表 4.1 性別・年齢の状況（N114）

		計	現年齢 64歳以下				現年齢 65歳以上		
			~54歳	55~59歳	60~64歳	65歳以上	65~69歳	70歳~	
全体	人数	114人	57人	8	19	30	57人	41	16
	割合	100.0%	50.0%				50.0%		
男性	人数	60	33	6	12	15	27	20	7
	割合	52.6%	28.9%				23.7%		
女性	人数	54	24	2	7	15	30	21	9
	割合	47.4%	21.1%				26.3%		

4.1.2 所在地域について

有効回答114人の所在地（7保健圏域）をみると、「大津」圏域が34人（29.8%）、以下、「湖南」27人（23.7%）、「甲賀」18人（15.8%）、「東近江」16人（14.0%）、「湖東」8人（7.0%）、「湖北」8人（7.0%）、「高島」2人（1.8%）、加えて「県外」が1人という状況であった。

図表 4.2 所在地域（圏域）の状況（N114）

		計	大津	湖南	甲賀	東近江	湖東	湖北	高島	県外
全体		114人	34人	27人	18人	16人	8人	8人	2人	1人
	現年齢 64歳以下	57	16	14	11	6	5	4	0	1
	現年齢 65歳以上	57	18	13	7	10	3	4	2	0

4.1.3 診断について

有効回答 114 人の診断に関する状況を見ると、まず、診断名は、「アルツハイマー型認知症」が 67 人 (58.8%) と最も多く、次いで「脳血管性認知症」が 18 人 (15.8%)、「前頭側頭型変性症」が 15 人 (13.2%) と続き、「レビー小体病」は 2 人 (1.8%) であった。

「現年齢 64 歳以下」「現年齢 65 歳以上」とも「アルツハイマー型認知症」が各々の年齢層の 6 割近い点で同様であるが、「現年齢 65 歳以上」では、「前頭側頭型変性症」が 9 人 (現年齢 65 歳以上の 15.8%) と、脳血管性認知症を上回っている点が特徴的であった。

図表 4.3 診断名 (N114)

		計	アルツハイマー型認知症	前頭側頭型変性症	脳血管性認知症	レビー小体病	その他
全体	人数	114 人	67 人	15 人	18 人	2 人	12 人
	割合	100.0%	58.8%	13.2%	15.8%	1.8%	10.5%
現年齢 64 歳以下	人数	57	31	6	13	1	6
	割合	50.0%	27.1%	5.3%	11.4%	0.9%	5.3%
現年齢 65 歳以上	人数	57	36	9	5	1	6
	割合	50.0%	31.6%	7.9%	4.4%	0.9%	5.3%

「その他」12 人 (10.5%) の内訳としては、「アルコール性認知症 (コルサコフ症候群)」が 2 人、他は、「水頭症」「ハンチントン病」「意味性認知症」などであった。

なお、「(認知症と聞いているが) 正式な病名はまだ聞いていない」とする回答も 1 人あった。

【参考】「その他」の内訳

その他の診断名	
1	アルコール性認知症 (コルサコフ症候群) (2)
2	水頭症
3	ハンチントン病
4	意味性認知症
5	急性硬膜下血腫
6	白質脳症

4.1.4 診断名の伝達(告知)について

診断を受けている場合に、最初に誰に伝えられたか については、「本人(家族等と一緒にの場合を含む)」が 18 人(15.8%)、「家族(本人と一緒にの場合を含む)」が 104 人(91.2%) という状況であった。

「本人」とした 18 人のうち、「本人のみ」の場合は 1 人、「家族と一緒に」の場合は 17 人であった。家族と一緒にとした 17 人のうち、14 人が「配偶者」であった。

「家族」とした 104 人のうち、「家族のみ」の場合は 87 人(家族が聞いた場合の 83.7%) であり、さらに「配偶者のみ」の場合は 59 人(家族のみの場合の 67.8%) であった。また、「配偶者以外」の場合は 21 人(家族のみの場合の 21.4%) であった。

「その他」とした 7 人のうち、「その他のみ」の場合が 6 人、うち「施設職員」のみが 5 人であった。

診断の初期段階においては、まず家族、特に配偶者に対して、診断名が伝えられるという状況がうかがわれた。

図表 4.4 診断名の伝達(告知) (N114)

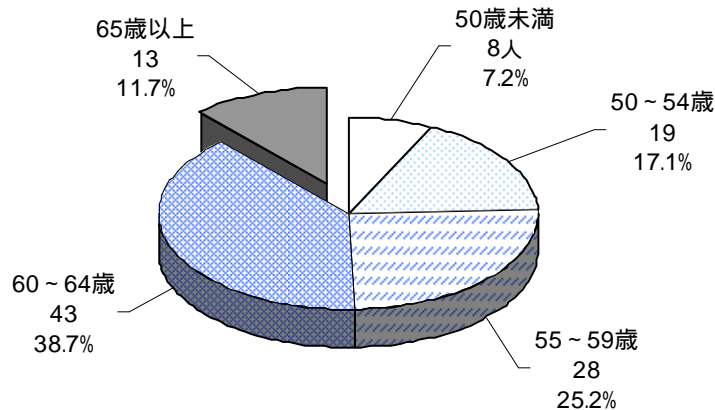
誰に伝えられたか(パターン)	人数	備考
本人	18人	全体 114 人の 15.8%
再掲) 本人のみ	1	
再掲) 家族と一緒に	17	本人 18 人の 94.4%
再掲) 配偶者	14	家族と一緒に 17 人の 82.4%
家族	104人	全体 114 人の 91.2%
再掲) 本人と一緒に	17	
再掲) 家族のみ	87	家族が聞いた 104 人の 83.7%
再掲) 配偶者のみ	59	家族のみ 87 人の 67.8%
再掲) 配偶者 + 家族	9	
再掲) 配偶者以外	21	家族のみ 87 人の 24.1%
再掲) 娘	6	
再掲) 息子	6	
再掲) 嫁	1	
その他	7人	
再掲) 家族と一緒に	1	
再掲) その他のみ	6	
再掲) 施設職員	5	

4.1.5 診断の時期・診断までの期間について

診断期の年齢

有効回答 111 人について、診断の時期を診断期の本人の年齢でみると、「60～64 歳」が 43 人 (38.7%) と最も多く、次いで「55～59 歳」が 28 人 (25.2%)、「50～54 歳」が 19 人 (17.1%) という分布であった。「50 歳未満」で診断を受けた方も 8 人 (7.2%) あった。

図表 4.5 診断期の年齢構成 (有効回答 N111)

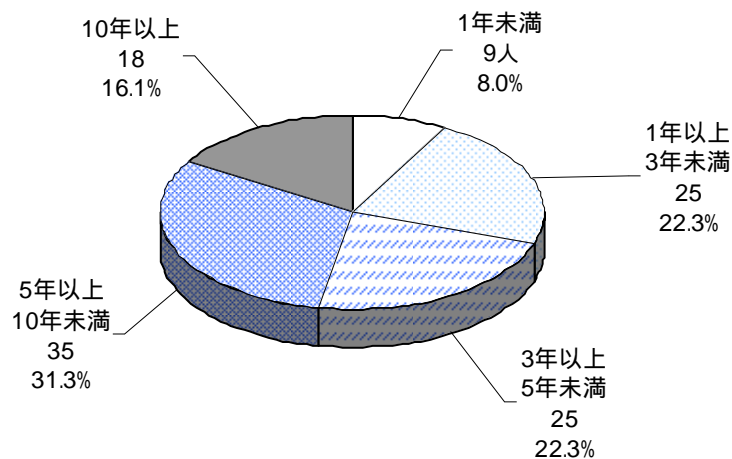


診断からの(現在までの)期間

有効回答 112 人について、診断からの期間(診断後どのくらい経過しているか)をみると、「5 年以上 10 年未満」が 35 人 (31.3%) と最も多く、次いで「3 年以上 5 年未満」「1 年以上 3 年未満」がともに 25 人 (22.3%) という状況であった。

「10 年以上」経過している方も 18 人 (16.1%) あった。

図表 4.6 診断からの期間 (有効回答 N112)

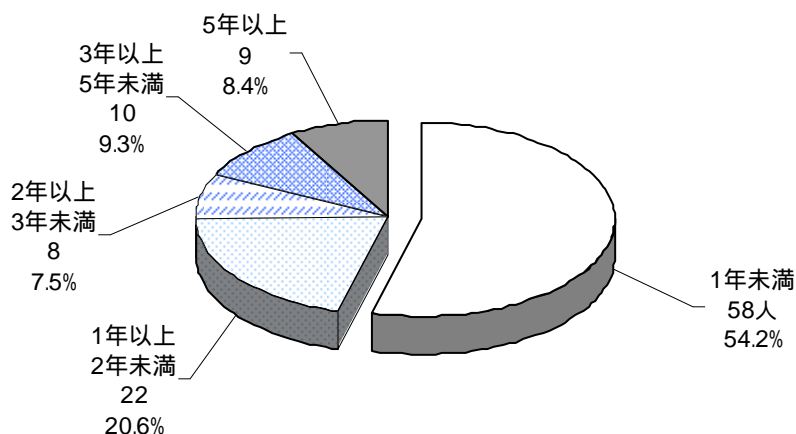


診断までの期間(医療機関にかかってから診断までの期間)

有効回答 107 人について、医療機関にかかってから診断に至るまでの期間をみると、「1 年未満」が 58 人(54.2%)と過半数を占め、次いで、「1 年以上 2 年未満」が 22 人(20.6%)、「3 年以上 5 年未満」が 10 人(9.3%)という状況であった。

最初に医療機関にかかるタイミング(症状の進行度合)もあるが(進んだ状態で医療機関にかかれれば診断までの時間も必然的に短くなる)、比較的早い期間で診断、伝達等が行われている状況がわかった。

図表 4.7 診断までの期間 (有効回答 N107)



4.1.6 入通院および介護サービス等利用について

入院の状況

有効回答 113 人について入院の状況をみると、「入院している」が 13 人(11.5%)、「以前入院していた」が 15 人(13.3%)、「入院したことはない」が 85 人(75.2%)であった。

「入院している」13 人のうち、「現年齢 64 歳以下」が 10 人(76.9%)と4分の3を占めていた。

図表 4.8 入院の状況 (有効回答 N113)

		計	入院している	以前入院していた	入院したことはない
全体	人数	113 人	13 人	15 人	85 人
	割合	100.0%	11.5%	13.3%	75.2%
現年齢 64 歳以下	人数	56	10	7	39
	割合	100.0%	17.9%	12.5%	69.6%
現年齢 65 歳以上	人数	57	3	8	46
	割合	100.0%	5.3%	14.0%	80.7%

通院の状況

有効回答 111 人について入院の状況を見ると、「定期的に通院している」が 85 人(76.6%)、「必要に応じて通院している」が 6 人(5.4%)、「通院していない」が 20 人(18.0%)であった。

通院については、「現年齢 64 歳以下」「現年齢 65 歳以上」において特段の差異はみられなかった。

図表 4.9 通院の状況 (有効回答 N111)

		計	定期的に 通院している	必要に応じて 通院している	通院して いない
全 体	人数	111 人	85 人	6 人	20 人
	割合	100.0%	76.6%	5.4%	18.0%
現年齢 64 歳以下	人数	54	43	4	7
	割合	100.0%	79.6%	7.4%	13.0%
現年齢 65 歳以上	人数	57	42	2	13
	割合	100.0%	73.7%	3.5%	22.8%

サービス利用の状況

有効回答 111 人について介護保険サービス等の利用状況を見ると、まず、介護保険サービスでは、「利用している」が 89 人(80.2%)、他の支援サービスでは、24 人(21.6%)であった。

年齢やサービス内容のマッチングの事情もあり、「現年齢 64 歳以下」の介護保険サービスの利用は、「現年齢 65 歳以上」に比して若干少ないが、両サービスの利用状況に特段の差異はみられなかった。

図表 4.9 サービス利用の状況 (有効回答 N111)

		計	介護保険サービス		他の支援サービス	
			利用して いる	利用して いない	利用して いる	利用して いない
全 体	人数	111 人	89 人	22 人	24 人	87 人
	割合	100.0%	80.2%	19.8%	21.6%	78.4%
現年齢 64 歳以下	人数	54	42	12	14	40
	割合	100.0%	77.8%	22.2%	25.9%	74.1%
現年齢 65 歳以上	人数	57	47	10	10	47
	割合	100.0%	82.5%	17.5%	17.5%	82.5%

介護保険サービスを利用する 89 人について、具体的なサービス内容をみると、「通所サービス」が 67 人(利用 89 人に占める割合 75.3%)と最も多く、次いで、「訪問サービス」が 25 人(同 28.1%)、「短期入所」が 24 人(同 27.0%)であった。

「現年齢 64 歳以下」では「通所サービス」の利用が多く、「現年齢 65 歳以上」では「短期入所」等の滞在系サービスの利用が多い傾向がみられた。

図表 4.10 利用している介護保険サービスの状況 (N89、複数回答)

		有効回答	通所サービス	訪問サービス	短期入所	特養	老健	グループホーム
全体	人数	89 人	67 人	25 人	24 人	11 人	4 人	7 人
	占率		75.3%	28.1%	27.0%	12.4%	4.5%	7.9%
現年齢 64 歳以下	人数	42	35	15	10	1	2	2
	占率		83.3%	35.7%	23.8%	2.4%	4.8%	4.8%
現年齢 65 歳以上	人数	47	32	10	14	10	2	5
	占率		68.1%	21.3%	29.8%	21.3%	4.3%	10.6%

また、他の支援サービスを利用する 24 人について、具体的な内容をみると、「家族会」が 16 人(利用 24 人に占める割合 66.7%)、「知的障害者授産施設」が 5 人(同 20.8%)であった。

他の支援サービスでは、「現年齢 65 歳以上」に比して「現年齢 64 歳以下」の利用が多い傾向がみられ、介護保険にはない「現年齢 64 歳以下」特有のニーズがうかがえた。

図表 4.11 利用している他の支援サービスの状況 (N24)

		計	家族会	知的障害者授産施設	その他
全体	人数	24 人	16 人	5 人	3 人
	割合	100.0%	66.7%	20.8%	12.5%
現年齢 64 歳以下	人数	15	10	4	1
	割合	100.0%	66.7%	26.7%	6.7%
現年齢 65 歳以上	人数	9	6	1	2
	割合	100.0%	66.7%	11.1%	22.2%

4.1.7 就業の状況

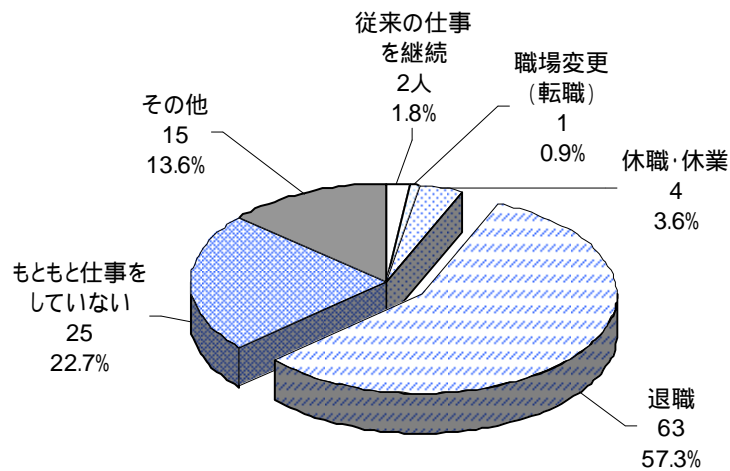
有効回答 110 人について、現在の就業状況をみると、「辞めた(現在は就業していない)」が 63 人(57.3%)と最も多く、次いで「もともと非就業」が 25 人(22.7%)、「休職・休業している」が 4 人(3.6%)という順であった。非就業には専業主婦の場合を含むため、人数が多くなっていると想定される。

現年齢による構成割合の特段の差異はみられなかった。なお、「その他」のうち 6 人は「定年による退職」、5 人は「退職後に発症」という回答であった。

図表 4.12 就業の状況 (有効回答 N110)

		計	仕事を 継続	職場変更 ・転職	休職 休業	辞めた	もともと 非就業	その他
全 体	人数	110 人	2 人	1 人	4 人	63 人	25 人	15 人
	割合	100.0%	1.8%	0.9%	3.6%	57.3%	22.7%	13.6%
現年齢 64 歳以下	人数	56	1	1	3	36	13	2
	割合	100.0%	1.8%	1.8%	5.4%	64.3%	23.2%	3.6%
現年齢 65 歳以上	人数	54	1	0	1	27	12	13
	割合	100.0%	1.9%	0.0%	1.9%	50.0%	22.2%	24.1%

図表 4.13 就業の状況 (有効回答 N110)



4.2 家族の状況

4.2.1 介護者の状況

主な介護者として択一回答のあった96人についてみると、「配偶者」が77人(80.2%)と最も多く、次いで「兄弟姉妹」が5人(5.2%)、「娘」「息子」「嫁」がともに2人(2.1%)という状況であった。複数選択のあった回答のほとんどは、「配偶者+子(娘・息子)」であった。

現年齢による特段の差異はみられず、「現年齢65歳以上」であっても配偶者が主たる介護者である場合が顕著に高かった。

なお、「その他」は、施設職員とする回答がほとんどであった。(本調査の対象は在宅療養者に限定していない)

図表 4.14 主たる介護者の状況 (有効回答 N96)

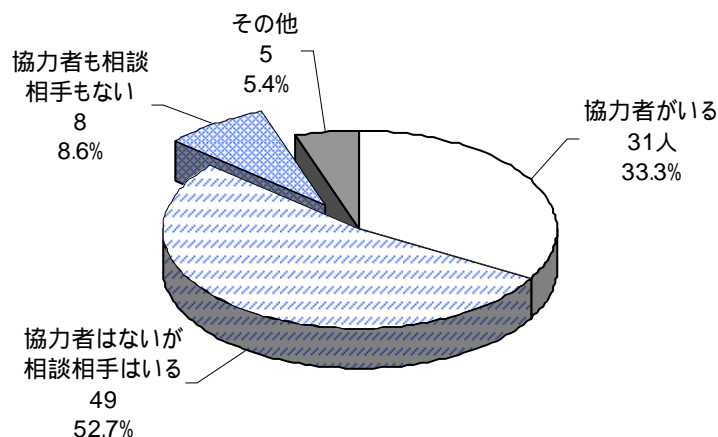
		計	配偶者	娘	息子	嫁	兄弟姉妹	他
全体	人数	96人	77人	2人	2人	2人	5人	8人
	割合	100.0%	80.2%	2.1%	2.1%	2.1%	5.2%	8.3%
現年齢 64歳以下	人数	49	37	0	1	0	4	7
	割合	100.0%	75.5%	0.0%	2.0%	0.0%	8.2%	14.3%
現年齢 65歳以上	人数	47	40	2	1	2	1	1
	割合	100.0%	85.1%	4.3%	2.1%	4.3%	2.1%	2.1%

4.2.2 介護の協力者

施設入所中の3人を除く有効回答93人について、主な介護者に、家族・親戚で協力者がいるか否かについてみてみると、「協力者がいないが相談相手はいる」が49人(52.7%)と最も多く、次いで「協力者がいる」が31人(33.3%)と、何らかの味方がある場合で9割弱を占めた。

他方で、「協力者も相談相手もない」とする回答が8人(8.6%)あった。

図表 4.15 主たる介護者の協力者 (有効回答 N93)



4.2.3 子ども(息子・娘)の状況

1人以上の子があるとした98人について、子の年齢(何歳代)をみると、子の人数ベースで、「30歳代」が117人(60.6%)と最も多く、次いで「40歳代」が32人(16.6%)、「20歳代」が28人(14.5%)という状況であった。

「現年齢64歳未満」では、20歳代・30歳代が中心であり、「現年齢65歳以上」の場合には、30歳代・40歳代が子の年齢層の中心であった。

子の性別は、男性(息子)が94人、女性(娘)が99人と、ほぼ同数であった。

図表 4.16 年齢(何歳代)別にみた子どもの状況 (N98、子の人数 N193)

		本人計	子計	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代
全 体	人数	98人	193人	16人	28人	117人	32人
	割合		100.0%	8.2%	14.5%	60.6%	16.6%
現年齢 64歳以下	人数	47	88	5	20	60	3
	割合		100.0%	5.7%	22.7%	68.2%	3.4%
現年齢 65歳以上	人数	51	105	11	8	57	29
	割合		100.0%	10.5%	7.6%	54.3%	27.6%

また、若年認知症の方1人あたりの子の人数をみると、「子2人」が60人(61.2%)と最も多く、次いで「子1人」が21人(21.4%)、「子3人」が16人(16.3%)の順であった。なお、平均は2.0人であった。

図表 4.17 1人あたりの子の人数 (N98)

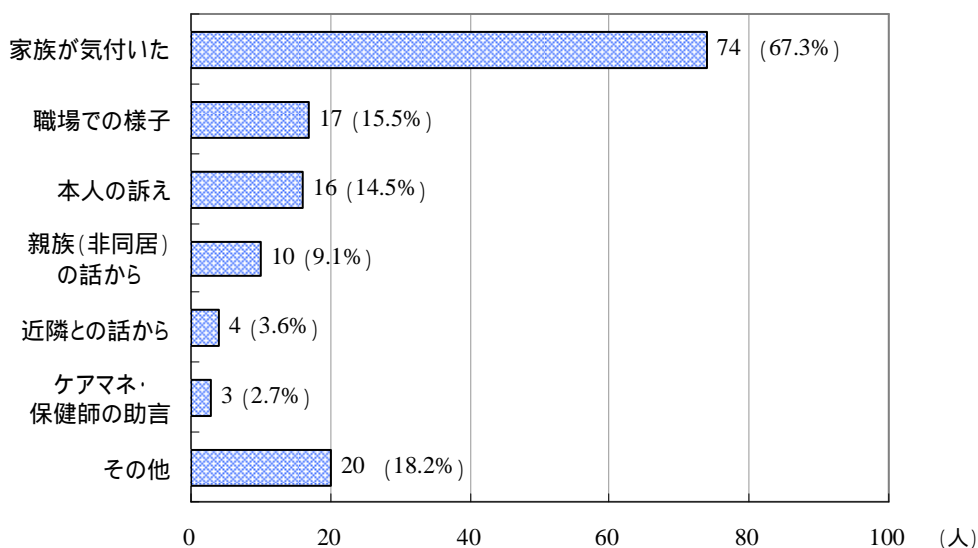
	計	子1人	子2人	子3人	子4人
人 数	98人	21	60	16	1
割 合	100.0%	21.4%	61.2%	16.3%	1.0%

4.2.4 相談(または受診)のきっかけ

有効回答 110 人について、相談もしくは受診のきっかけとなった事からをみると、「家族が気付いた」が 74 人(67.3%)と最も多く、次いで「職場での様子」が 17 人(15.5%)、「本人の訴え」が 16 人(14.5%)という順であった。

「その他」が 20 人と多くなっているが、具体的には、「職員の気づき」「他の原因による受診」などが多かった。

図表 4.18 相談(または受診)のきっかけ (有効回答 N110、複数回答)



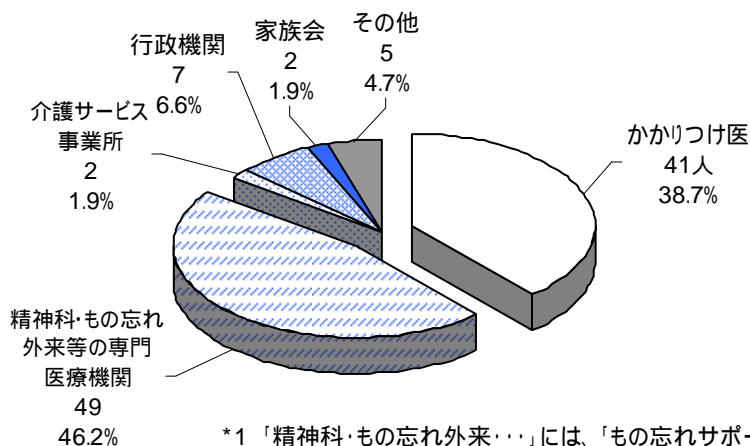
【参考】「その他」の内訳

	サービスの内容	回答数
1	入院・入所中の職員が気付いた	7人
2	他の原因での受診中(事故後の医療機関やかかりつけ医)	2
3	歩行困難となり入院期間中に言動の異変に気づく	1
4	(精神科医の)診察で	1

4.2.5 最初の相談(または受診)先

家族、親戚、知人以外の相談(または受診)先についてみると、「精神科・もの忘れ外来等の専門医療機関」が49人(46.2%)と最も多く、次いで「かかりつけ医」が41人(38.7%)であり、医療機関で全体の約85%を占めた。

図表 4.19 最初の相談(または受診)先 (有効回答 N106)



*1 「精神科・もの忘れ外来・・・」には、「もの忘れサポートセンターしが」を含む

*2 「介護サービス事業所」には、「居宅介護支援事業所」「ケアマネジャー」を含む

4.2.6 現在の相談(または受診)先

現在の相談(または受診)先についてみると、「精神科・もの忘れ外来等の専門医療機関」が73人(64.0%)と最も多く、次いで「介護サービス事業所」が58人(50.9%)、「かかりつけ医」が54人(47.4%)という状況であった。

病気の症状や進行については専門医療機関・かかりつけ医に、日常のケアや介護については介護サービス事業所に、と相談先を目的に応じて複数持っている状況がうかがえた。

「現年齢 64歳未満」「現年齢 65歳以上」ともに同様の傾向であり、特段の差異はなかった。

図表 4.20 現在の相談(または受診)先 (N114、複数回答)

		計	かかりつけ医	専門医療機関	民生委員	介護サービス事業所	行政機関	その他
全体	人数	114人	54人	73人	4人	58人	12人	6人
	占率		47.4%	64.0%	3.5%	50.9%	10.5%	5.3%
現年齢 64歳以下	人数	57	29	35	3	32	9	3
	占率		50.9%	61.4%	5.3%	56.1%	15.8%	5.3%
現年齢 65歳以上	人数	57	25	38	1	26	3	3
	占率		43.9%	66.7%	1.8%	45.6%	5.3%	5.3%

4.3 家族の健康状態等について(自由記載回答)

各設問についての有効回答の中から、キーワードで共通するものをカウントして全体傾向を把握する。1つの回答中に複数のテーマの記載がある場合には、いずれにもカウントしている。

4.3.1 家族の日常生活の変化(健康・仕事面)

健康・仕事面に関し、家族の日常生活に生じた変化については、「身体的・精神的な疲労が蓄積」が26件、「病気・体調不良」が25件、「介護中心の生活に」が22件、「失職・転職・介護休暇」が19件の順であった。

もっとも、「特に変化はない」とする記載も14件あった。

図表 4.21 家族の日常生活の変化 (N95)

家族の日常生活の変化(健康・仕事面)		回答数	
1	身体的・精神的な疲労の蓄積	26件	(27.4%)
2	病気になった または 体調不良を起こした	25	(26.3%)
3	介護中心の生活に変化	22	(23.2%)
4	失職・転職・介護休暇の増加	19	(20.0%)
5	特に変化はない	14	(14.7%)

【参考】主な回答

27	ストレスを強く感じ、このままではだめになると思った。仕事にしていた教室を閉じた(本人徘徊強い頃のため)。子はいらだつことが多くなった。
39	子どもが小さかったので、もともと仕事には行っていなかったが、徘徊するようになり、びっちり家の中で介護することになり、自由時間がとれなくなった。 子どもたちは遊びにでかけにくくなったり、仕事に出られなくなったが、おばあちゃんの状態をよく理解し、文句も言わず、今までどおり母とも接してくれた。
61	夫はすでに56歳で発病していた。仕事にいける状態ではなく、介護が必要になり、仕事を持っていた私(妻)もやむを得ず退職をし、徐々にいくつもの症状が出てくるため、24時間体制で介護をしなければならず、不眠が続きうつ状態だった。
72	以前より高血圧の薬を服用していたが、また一段と高くなり薬を変更または増量してもらっている。他に腰痛があり、脳梗塞も少し小さいものがあるとのことである。
80	介護者(妻)は病気がちで孫の養育と本人の介護はとても体力的・精神的に苦痛であるが、まず自分のことを後回しにしているために、この頃では体調不良で明日のことを心配する余地がない。幼い子どもを一生懸命育てている娘たちに介護を手伝って欲しいと言えない。
92	年を重ねるごとに目が離せなくなり、仕事といってもパートもしくは身内の手伝いぐらいしかできない。今は父が健康だが、2人の介護となれば仕事はもろろんのこと、ストレスの解消も難しくなると思う。
103	夫婦で一緒にハウスで野菜作りをして働いたが、今夫はまったく介護だけになり、働けなくなった。 長男の嫁は正社員で働きにいていたが、介護のため3年前に仕事は辞めた。

4.3.2 健康や仕事以外の日常生活の変化 (注)

健康や仕事以外の日常会話や様子についての変化としては、「会話の減少」が 21 件、「本人の状態悪化による介護負担増」が 18 件であった。

本人の変化に関する記載が多く、内容のバラつきがみられた。

図表 4.22 健康・仕事以外の日常生活の変化 (N71)

健康や仕事以外の日常生活の変化		回答数	
1	会話の減少(意思疎通が図れない)	21 件	(29.6%)
2	本人の状態悪化による介護負担増	18	(25.4%)

【参考】主な回答

21	徐々に進行している。最近はハンドバッグやバッグに衣類・手ぬぐい・日用品をいっぱい詰めて、外出のときは全部持っていこうとする。朝起床し何を着てよいかわからない、風呂で着衣をぬごうとしない、食後の食器洗いも途中でやめる、など中途半端な状態で終わることが多くなってきている。
60	妻が文字は完全に忘れてしまい、言葉も忘れて、ウン、イヤ、おいしい、寒い、暑いなど言葉が少なくなり、聞いても答えなくなった。意思の疎通ができなくなり、会話が少なくなった。
79	だんだん身の回りのことができなくなっていて、日常の会話もうなずくだけ。
91	本人は徐々に生活能力が落ちている。字もあやふやとなり、言葉ももつれることがあり、自分から何かをすることができなくなった。
102	日常は昼近くまで寝ている。服薬の管理ができない。排尿は行けるが、もらしているようで洗濯物が多く出る。食べるものが自分でできない。本人の独自の生活で過ごしている。勘違いで人の物を自分のものと思い込み持ち帰る。生活全般が困難。
103	家族はみなストレスがたまり、精神的に参っている。
104	現在本人は意欲がなく、あるといえば食欲のみである。会話は今見ているテレビのことくらいで、まともな会話は無い。孫が来ていても大声で怒鳴ったり、物を投げることもあり、目が離せない。
105	プライドが非常に高く、傷つけないよう言葉遣いなど気をつけなければならない。突然怒りだすことがあり、対応が難しい。

(注) 調査票設問の表現より、「“家族の”健康・仕事以外の変化」ではなく、「“本人の”変化」に関する回答が多くなっている。

4.3.3 日常の介護に関する困難な点や必要な支援について

日常の介護に関する困難な点や必要な支援については、「日常介護や介護継続に対する不安」が30件、「経済的な支援・バックアップ」が28件、「介護サービス・支援サービスの充実」が22件であった。

図表 4.23 日常介護における困難な点や必要な支援 (N83)

	困難な点や必要な支援	回答数	
1	日常介護や介護継続に対する不安	30件	(36.1%)
2	経済的な支援・バックアップ	28	(33.7%)
3	介護サービス・支援サービスの充実	22	(26.5%)
4	施設の入所待ち(在宅介護の困難)	8	(9.6%)

【参考】主な回答

6	年金収入のみになって、自分の時間を作るために本当はもっとサービスを使いたいが、まず負担料のことを考えてしまう。障害の認定にも関わらず、まだ先が長いと思うと不安。いつまでデイサービスでみてもらえるか(今でもいろいろと迷惑をかけているようなので)心配。
28	介護保険の適用範囲について、ケアマネジャーと協議しているが、支援制度ができてからは逆に負担が重くなった。例えば、居室の掃除について制限があり不満である。介護保険料金は年々増加しているのに、サービスは低下してきている。何とかしてください。
41	どんどんできなくなっていくと思うが、私はいつまで働けるのか、生活面、経済面のことを考えると不安で仕方がない。
44	・経済的に介護保険を利用していても食費負担など上がった分で大変になっている。 ・自分が倒れたときの生活不安がある。
48	近くに若年認知症の介護サービス事業所がなく、送迎が大変である。専門または他の病院で入院しても一人では入院できず、つきそいが必要である。病院側も看護師不足で対応も悪く嫌がれている。
66	暴力に対する怯えがあり、夜も眠れぬ日々が辛い。 自宅では見守り体制がなく、精神的負担が大きいため、サービスを利用することで安心感が得られているが、経済的な負担も大きい。
76	ヘルパーの資質、特に物理的介護より精神的な面でもっとレベルアップしてほしい。 デイサービス等もボケが行くという社会のあり方を変えるにはもっと認知症が病気であることを世間に知らしめること。介護者は世間の風当たりで自信を失くし、自殺すら考えてしまう(病気の本質を知らないのも、怠け者呼ばわりしたり、大げさと言われたりする)。
112	今後ずっと病院生活はかわいそうなので何とか近親とも相談し同居をと感えているが、介護の面に関しての不安と両親とも同じ病気で倒れていて半身が不自由なので、働きながら私たちが見ていこうと思うのはとても不安である。